

みなべ・田辺の梅システム世界農業遺産フォーラムin東京

～伝統農法が育む「紀州の梅」でもっと元気～

和歌山の梅の魅力を首都圏の人たちに知ってもらおうと、11月19日、イイノホール(東京都千代田区)で、「みなべ・田辺の梅システム 世界農業遺産フォーラムin東京」を開催しました。フォーラムでは「伝統農法が育む『紀州の梅』でもっと元気」をテーマに4名の方に持続可能な農業や、梅の機能、楽しみ方など幅広く講演いただきました。また、同会場において、みなべ・田辺地域等の梅販売事業者による梅製品の展示販売「うめえ！うめまつり」も開催されました。

また、地球温暖化の影響で増大がけねんされる自然災害に強く、生物多様性保全につながる持続可能な農業の仕組みを広めることを通じ、国連のSDGs(持続可能な開発目標)達成に向けても、

観光につながる話した。

林業や農業、水産業は一つのつながりとして、閉じた仕組みをしています。そして、その仕組みを大事にしていこうというのが世界農業遺産の考え方です。本来なら森林でしか利用できない急傾斜地を梅畑にし、草を生やして表土の乾燥流出を防ぎ、刈り取った草は肥料として梅に還元。梅の花は、薪炭林に生息するミツバチや養蜂業者にとって早春の貴重な光の供給源になり、同時に梅の受粉を助ける共生関係が構築されている。また、南高梅など優れた品種も生みだし、梅の食文化はユネスコ無形文化遺産、和食の重要な要素になっている。



世界農業遺産と
みなべ・田辺の梅システム」
東京大学サステイナビリティ額連携研究機構(IR3S)機構長 特任教授 武内和彦氏

世界農業遺産は重要な手がかりになるはず」と訴えた。

「まあるい地球と梅」
シンガーソングライター、
IUCN(国際自然保護連合)親善大使、
絵本作家
イルカ氏



白浜を意識したパンダを手書きした着物に、絶滅危惧種をデザインした帯という和服姿で登場。地球は梅の実のように丸くて、生きものはみんなつながっています」と生物多様性の重要性を訴えた。手間暇をかけ、日本で育まれた着物、食べ物の大切さについて、「下キと暮らす郷づくり」で世界農業遺産認定された佐渡で見たトキの定着にをモデルにして話した。自著の絵本「まあるい地球のち」を朗読し、同名の歌を会場と一緒に歌ったイルカ氏は、まあるい小さな梅の中にすばらしいものがギュッと詰まっていると思うと大きな力になります。みなさまの農業が世界にどんどん発信されればいいなと思います」と話した。

梅干しの健康増進機能」

和歌山県立医科大学准教授
宇都宮洋才氏

身体に良いといわれる梅を科学的に研究した成果について説明し



た。梅の制菌作用については、梅干しが、ブドウ球菌の増殖やピロリ菌の運動、インフルエンザウイルスの細胞感染を抑制することを確認。その機能物質も突き止め、みなべ町でピロリ菌の運動能阻害機能、県立医大などが抗ウイルス機能の特許を取得している。また、梅干しは塩分を含む一方、血圧上昇を抑制し、脂肪細胞に働いて肥満を抑制する作用もある。卵細胞の周囲の細胞のストレスによるダメージを減らすことで不妊効果がある可能性も話した。

梅(Ume)の種は、夢(Yume)の種

梅酒ソムリエ
金谷 優氏

宇都宮准教授や国連大学のイヴォーン氏、母子教室を主催する酒寄氏、女優で大学生の住吉さん4名の方に登壇してもらい、実際に梅酒を試飲してもらいながら、梅酒の魅力について話した。梅の種類や熟成法、漬けるお酒によって2千種以上の梅酒がある話し、梅酒、梅シロップ作りの講座などを通じて梅や梅酒には、多くの人を豊にする機能性もあります。今後梅酒を通して世界平和のお手伝いができればと思います」と話した。

